

生まれ変わろうとする松保護士

一般社団法人 日本松保護士会 石黒 秀明

平成 29 年 4 月、松保護士会は、法人化して「一般社団法人日本松保護士会」に名称変更し、新しい組織として再出発しました。実はこれまでの会は、内容が伴わないところもあり、「松保護士なんて資格は不要だ!」などという声があったことも事実です。そのようなこともあり、いま、松保護士会は生まれ変わろうとしています。

ここで樹木医と松保護士を比較してみましょう。樹木医も松保護士も樹木に対する気持ちは同じはずです。平成 30 年 1 月現在、松保護士登録者数は 567 名で、そのうち半数程度を樹木医が占めています。このことから、樹木医も松保護士に興味があることがわかります。逆に松保護士の中でも、まずは松保護士になってから樹木医を目指す人も多いようです。松保護士の分野は樹木医に比べてマツに特化された狭い分野ですが、その狭い分野ですら実際の診断となれば、頭を悩ませる事例にあたることも多いです。

ここで具体的な例を挙げて話を進めてみましょう。まずはベールマン法による線虫の抽出です。松保護士会では、研修等で繰り返し実践しています。材片の採取方法や外皮を混入させない利点、欠点等も実践に取り入れています(そもそもマツには多種の線虫が存在することを理解している)。それでも間違い、失敗は起こります。続いて樹幹注入法について考えてみましょう。形成層に障害を与えた施工例をしばしば見かけますが、その多くは技術を伴わない作業に原因するものです。そのような事例の診断書には、「樹木医、松保護士等の専門家に作業を依頼する」と書かれているのをみかけますが、「それって本当に大丈夫なの?」と考えてしまいます。資格取得=技術取得ではないからです。繰り返し失敗することにより取得するのが技術です。しかし実際の現場では失敗ばかりできません。

そこで、有効な方法のひとつに、大勢で行う実践さな

がらの技術講習会があります。このような講習会に参加することは、他人の良い結果や失敗を自分の目で見て判断でき、自分のものにできるという大きなメリットがあります。経験こそエキスパートへの近道です。ドリルの径や打つ角度、位置、深さ、施工時間、自然圧・加圧、打ち替えの判断、痕処理など、これらが1本の線につながって初めて技術の取得です。日本松保護士会では、このような講習会を開催しています。一緒に技術向上を目指し、「樹幹注入には自信がある!」といえる施工者になりませんか。

さらに、新しくなった日本松保護士会は、「一歩先ゆく松保護士」を目指しています。少し難しい事例になりますが、例えば夏前までは緑色の葉を呈したマツが夏の終わりにすっかり変色したとします。そしてそのマツから線虫が検出されたとします。あなたならばこの結果をどのように捉えるでしょうか。

- ①マツから線虫検出イコール(以下、「=」)マツ材線虫病
- ②マツから線虫不検出 = マツ材線虫病でない
- ③マツから線虫検出、かつDNA検査が陽性反応 = マツ材線虫病

実はこれらの方程式はどれも成り立ちません。これらを正確に判断するには、マツを正確に診断する技量が必要になります。マツ枯れの判断は、マツノザイセンチュウの存在を証明するという基本はありますが、線虫にこだわり過ぎてはいけません。診断とはあらゆる可能性を一つひとつ検証しながら結論へと導くものなのです。

新しく生まれ変わった(一社)日本松保護士会は、会員の技術向上を目指して、さまざまな取組を予定しています。まずはマツという特化された分野で、一緒にマツの病虫害など、突き詰めた話を一緒に考えてみませんか。(一社)日本松保護士会では会員を募集しています。